

近代資本主義とアソシエーション

—永遠の希望と永遠の絶望—

2016年11月19日

小野塚 知 二

はじめに

(1) 資本主義とその人間的基盤をめぐる通俗的な解釈

ホモ・エコノミクス (homo oeconomicus) と市場の自動調節機能

人と人之间には何の関係もなく、誰もが価格のみを指標に自己利益を最大化しようと、個別にかつ独立に行動し、それらを市場が調節・統合する (=結果としての共同性)。

(2) 「他者理解 (other regarding)」あるいは「組織化された複雑性 (organized complexity)」

あたかも「組織化されない複雑性 (disorganized complexity)」であるかのようだが、実は、投機的な市場での売り抜けのような個人的かつ利己的 (selfish) な行動も、自分しかみえていない (self regarding) なわけではなく、他者理解 (「誰かがいまこの瞬間に売りに転ずるかもしれない」) を前提になされているから、市場に参入する人々の間に相互関係がないわけではない。部品・要素の間に相互関係の成立しない「組織化されない複雑性」ではなく、「組織化された複雑性」こそが市場 (また民富と言う意味での Common Weal) の本質である。

(3) 経済学における社会 (=個人間の関係)

経済学は独占とか談合のような特殊な場合以外は、独立した人と市場のみを想定してきたが、経済学の出発点において A・スミスは「共感 (sympathy)」を市場の成立する前提としたし、また、現実の市場の中では無数の暗黙の独占があると見ていた。実際に観察される市場も、ばらばらの諸個人が競争しているよりも、何らかの独占・団結・談合のある方が (英連邦特惠関税地域 (Commonwealth) でも欧州統合でも) 常態と考えて差し支えないだろう。

I 近代的人間と共同性・協同性

1. 独りで立つ近代人

(1) 絶対者との対峙と社会性

信仰に介在する社会性 (教会組織) の排除と信仰の結果としての社会性 (宗派 (Sekte))。

さらに、福音主義 (Evangelicalism) は、一方では福音書のみを媒介に神 (絶対的他者) の前に独りで立つことを求める個人主義的な性格が色濃いが、他方では、下層階級や原住民を「善導」しようとする介入的でお節介な性格を帯びていることも近年では明らかにされている*1。

(2) 独立独行

孤島のロビンソン (cf. 喜界ヶ島の俊寛との対比) ←「一攫千金」を狙う冒険的商人に対する中産的勤勉の美德。⇒独立・自尊・自律の近代的人間類型に対する二つの問い。

A : 「近代人」という問題をわれわれはすでに卒業しているのか？

自由民権運動や民党 (「民権」を唱えた集団) が民権よりもしばしば国権の独立 (治外法権撤廃・関税自主権回復・三

*1 南西太平洋での武器=労働交易を規制しようとするイギリスの福音主義諸派の思想と運動については、Takeuchi [2009] を、また、産業革命期のイギリスで下層階級を善導・組織化しようとする福音主義諸派の思想と運動については長谷川 [2014] を参照されたい。

国干渉反対)を優先させた日本人の社会的遺伝子。「人権(派)」が揶揄や軽蔑の響きを帯びて、「理想を振りかざすだけで、非現実的、反権力的で反秩序的な人々」という意味で使われる現状。与党の憲法改正草案に、自由と権利は「濫用してはならず、自由及び権利には責任及び義務が伴うことを自覚し、常に公益及び公の秩序に反してはならない」と明記される状況。これらを考慮するなら、「近代人」はいまも大きな課題といわざるをえない。

B：とはいえ、『ロビンソン・クルーソー』という物語は奇妙で、異常ではないか？

⇒①ロビンソンは当初独りではあるが、難破船から引き揚げたもの(過去の労働の蓄積物・文明の成果物)を利用しえた。つまり資本を所有できた⇒過剰蓄積・過剰防衛を行う<病的現代人>の原形としてのロビンソン*2。

②独立独行のロビンソンにすら他者は必要である。なぜフライデイは登場しなければならないのか？ この物語は単純明解ではない。

③しかも、他者との関係は水平的ではない。人間関係の源基としての主従関係。

2. 社会的な近代人の協同性(association)

(0)「協同性」：予め定まった掟や矩(身分制・共同体)に担保された共同性ではなく、おのれの欲望をよりよく(効率的に)満たすのに独りではなしえぬことをするために、目的ごとに契約的に(しかも、変更可能な契約として)に形成される共同性で、そこへの出入りも非加入も個人の自由に委ねられる。

(1) フランクリン自伝のジャントー・クラブ

- ①自己修養(勤勉・探究心・合理主義)の手段としての集団。独りではなしえぬことをするための共同性。
- ②有無何れかの静的な近代人ではなく、完成への動態の中の近代人⇒S. Smiles, *Self-Help*, 1859. フランクリンより百年遅れの世俗的禁欲主義のイギリスでの流行=(3)の回避。

(2) 社会主義者の夢想した協同性

サン=シモン、オーウェン、フーリエ、初期マルクスは、産業・生産・物的目的(これも、独りではなしえぬこと)のための人間関係をデザインした。関係のための関係(ただの仲好しクラブ)ではなく、生産という目的の手段としての人間関係。ただし、彼らは、近代産業社会が効率性や労指・労支関係*3を免れないことを自覚していないか、隠蔽している。サン=シモンは資本家支配を肯定したし、マルクスの理想は指揮者がいても楽員全員がいそいそと音楽をできる関係であったが、いかにしてそれが可能かにマルクスは論及していない*4。しかし、実際の西洋近代音楽はM. ヴェーバーも注目したように、合理化・組織化・支配の歴史を示している。

(3) 労使関係における団体(trades societies, trade unions)

労働者と指揮者双方の利害は、労働市場でも労働現場でも一般的には一致しないから、

*2 ロビンソンのこうした特色については岩尾[1994]を参照されたい。また、土地制度史学会(政治経済学・経済史学会の前身)の1997年春季総合研究会は、「経済史における人間像—大塚史学の方法をめぐって—」と題して、大塚の人間類型論の可能性と問題性について議論した(河合康夫[1997]参照)。

*3 近現代社会において自由な諸個人が協同で何事かをする場合にも、効率性(よりよい結果)を求めるのなら、そこには必ず機能的な指揮命令・服従実行と支配・従属関係が発生する。つまり、労働者と指揮者ないし支配者の関係(「労指関係・労支関係」)こそが、近代(個人が共同体・身分制から解放されて自由な社会)における生産関係の本質と考えることができる。「労資関係」とは資本制におけるその現象形態であり、「労使関係(industrial relations, Arbeitgeber-Arbeitnehmer Verhältnis)」とは産業社会における労指関係の通俗的ないしは社会的・属人的な表現・理解である。小野塚[1989]3頁と注(5)(9~10頁)、および大津[2014]を参照されたい。

*4 小野塚[1998]15-16、25-26頁、および小野塚[2014]10-15頁を参照されたい。

スミスが素朴に観察したように、双方に何らかの独占と、そのための恒常的な集合性が発生する。すなわち、ギルドが解体・形骸化したのちの近代の経営者団体と労働組合である。L. ブレンターノが労働組合を「現代のギルド」と喝破することによって、初期社会主義者たちが無視・隠蔽した労指関係は可視化されたのであった*5。

(4) 労働組合主義者たちのジャンタ(1850～60年代イギリス、TUCの源流)。

アソシエーションのアソシエーション。アソシエーションによるアソシエーション内部の成員個人の統制という問題だけでなく、上位のアソシエーションによる下位のアソシエーションの統制(殊に戦後所得政策における労組による成員統制とTUCによる傘下労組の統制)という問題をも生み出すことになる*6。⇒Ⅱ-2.-(3)

Ⅱ 現代と協同性

1. 誘導され、強制される共同性

- (1) さまざまな国民運動・市民運動*7、隣組、企業社会。
- (2) フランスの「社会連帯」と破毀院判決*8。
- (3) 介入的自由主義(福祉国家、現代企業の労務管理・企業内福利、学生運動等々)*9。

2. 協同性の末路

- (1) 自主管理社会主義ユーゴスラヴィア：民族(「個別的同質性」の幻想に基づく価値)を超えられない。
- (2) 自主管理企業：自主管理でも、労指・労支関係(産業の効率性)を超えられない*10。
- (3) 「労働組合の専制」(①19世紀中葉の経営者の言説、②サッチャリズムの労働法改革・労組攻撃に抵抗できなかった労働組合)：「アソシエーション」は自立・自律した個人の名による批判に対して無力である*11=秩序ではなく個人に基礎付けられたアソシエーションの本質的な弱さ。

むすびにかえて

(1) 協同性の末路

なぜ、自立・自律した諸個人の、(出入り)自由な協同性は、強制や抑圧の装置となるのか。「自由なアソシエーション」は実現されたことのない夢である。しかし、この実現されざる夢は、いまもさまざまな言葉(「共生」、「連帯」、「ネットワーク」等々)に言い換えられて、語られ、夢見られ続けている。

*5 Brentano[1871]pp. 88-93(訳書109-115頁)を参照されたい。

*6 小野塚[1999]349-354頁を参照されたい。

*7 国民運動・市民運動の誘導・強制・介入的な性格については、たとえば、スウェーデンの経験を解き明かした石原[1996]と、小野塚の書評(東京大学『経済学論集』第63巻第4号、1998年1月、114-119頁)を参照されたい。

*8 フランスの「社会連帯」(殊に19世紀末以降の退職年金法案・1910年法)に採用された「強制原則」とそれへの反撃については、田端[1985]136-141頁を参照されたい。

*9 介入的自由主義については小野塚[2009]9-29頁を参照されたい。

*10 自主管理企業が労指関係をきっかけに破綻する事例研究として井上[1991]を参照されたい。

*11 「労働組合の専制」をめぐる19世紀中葉の経営者の言説については小野塚[2001]第3-4章を、サッチャリズムによる労組攻撃の論理については小野塚[1999]387-389頁および梅川[2001]537-540頁を参照されたい。

(2) アソシエーションはなぜ失敗し続けてきたのか？

見果てぬ夢としての協同性への期待・幻想がかくも永く継続・反復しているのは、反省の不在以外に、いかなる理由が作用しているのか。資本主義・市場経済を「組織化されない複雑性」・結果としての共同性とみなし、自覚的な共同性を無視する見方には、人間らしさの不在を感じ、しかし、そうかといって、予め定まっておき是非もない伝統的・身分制的共同性には不自由を感じずるからこそ、第三の共同性としてのアソシエーション(自由でかつ人間らしい関係)は期待されたのだが、この期待はなぜ裏切られてきたのか？

(3) 近現代が見落としてきた何か

⇒近現代2世紀以上に及ぶ「アソシエーションの夢」には、何か大切なことを見落としてきた可能性がある。

① 効率性の呪縛=労指関係の必然性。

「よりよい結果」を求める目的合理性や「飽くなき欲望」は、社会を効率的な手段の牢獄と化す(ヴェーバーの「近代」問題)。仲好しクラブですら「効率」化する危険性。

② 「抑圧・支配・競争・闘争」という反理想の作用

「自由・平等・友愛・平和」の理想に対して「抑圧・支配・競争・闘争」という反理想(ディストピア)が、ヒトの本質か社会的構成物かは措くとしても、作用しているのではないか。

③ 想像の共同体としてのネーションの根強さ

では、そこで真に根強いのは「国家」か、「国民」か、「愛郷心(patriotism)」か？

④ ほかに何か見落としていないか？ 自他二分法的な「個人」の名によるアソシエーション批判。

⇒今日、大塚久雄の仕事を継承する一つの仕方は、この近現代の落とし物探しである。

文献リスト

- 石原俊時『市民社会と労働者文化 —スウェーデン福祉国家の社会的起源—』木鐸社、1996年。
井上雅雄『日本の労働者自主管理』東京大学出版会、1991年。
岩尾龍太郎『ロビンソンの砦』青土社、1994年。
梅川正美『戦後体制の崩壊(サッチャーと英国政治2)』成文堂、2001年。
大津真作「ラングと近代社会批判 —永遠の奴隷制と野蛮」田中秀夫編『野蛮と啓蒙：経済思想史からの接近』京都大学学術出版会、2014年。
小野塚知二『『集団的自助』の論理 —19世紀イギリス労働者上層の文化—』『歴史評論』通巻第465号、1989年1月、pp. 63-83。
小野塚知二「労使関係におけるルール —19世紀後半イギリス機械産業労使関係の集団化と制度化—」(上)『社会科学研究』第41巻第3号、1989年11月、pp. 1-102。
小野塚知二「生協における管理と民主主義」協同組合総合研究所研究報告書第21集『労働運動をめぐる論点の現代的総括』、1998年8月、pp. 1-29。
小野塚知二「労使関係政策—ヴォランティアリズムとその変容—」毛利健三編『現代イギリス社会政策史 1945—1990』、ミネルヴァ書房、1999年4月、pp. 323-393。
小野塚知二『クラフト的規制の起源 —19世紀イギリス機械産業—』有斐閣、2001年。
小野塚知二「序章 労務管理の生成とはいかなるできごとであったか」榎一江・小野塚知二『労務管理の生成と終焉』(法政大学大原社会問題研究所叢書)日本経済評論社、2014年。
河合康夫「1997年度春季総合研究会報告」『土地制度史学』157、1997年10月、76-77頁。
長谷川貴彦『イギリス福祉国家の歴史的源流：近世・近代転換期の中間団体』東京大学出版会、2014年。
Lujó Brentano, *Die Arbeitergilden der Gegenwart, Erster Band: Zur Geschichte der Englischen Gewerkvereine*, Verlag von Duncker und Humblot, 1871, 島崎晴哉・西岡幸泰訳『現代労働組合論(上)』日本労働協会、1985年。
Mahito Takeuchi, *Imperfect Machinery?: Missions, Imperial Authority, and the Pacific Labour Trade, c. 1875-1901*, VDM Verlag Dr. Müller, 2009.